



Message

なごや水物語 ～先達の智恵を未来へ～

2010年の名古屋

名古屋のまちづくりは、1610年の名古屋城築城と清須からの町ぐるみの移転（清須越）に始まります。今年、この「名古屋開府」から400年の節目の年であり、一年を通して名古屋が盛り上がります。7月27日～30日にはポートメッセ名古屋で「下水道展'10 名古屋」が、10月にはCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開催されるなど、吉宗将軍と競った尾張藩第7代藩主徳川宗春が愛した晴の名古屋がよみがえります。

名古屋における上下水道の歴史は、古く江戸時代の「巾下上水」や「掘割」にルーツを求めることができます。明治時代に入ると近代上下水道の整備に向けた機運が高まり、1912（大正元）年には初の下水道竣工告示が、1914（大正3）年には給水が開始されました。本市の上下水道事業は間もなく100年を迎えます。



名古屋市副市長

山田 雅雄

Yamada Masao

創成期を支えた杉戸清氏

上下水道の創成期を語る上で外せないのが、秀吉と同じく尾張中村で生まれた、元名古屋市長杉戸清氏の存在です（実は私も尾張中村生まれ）。杉戸氏は、1926（大正15）年名古屋市に入庁し、一時期内務省に属したことがありますが、水道局長や助役等を経て1961（昭和36）年から市長を12年間務めました。

日本で初めて活性汚泥法を採用した堀留下水処理場や熱田下水処理場の設計、実用化されたばかりの鉄筋コンクリート技術を取り入れた東山配水池の設計など、偉大な功績を残されました。当時はコンサルタントも存在せず、全て“直営”で設計したわけです。施

設完成から約80年が経過した現代でも活性汚泥法や鉄筋コンクリートの技術が全国的に普及しているのは、みなさまご存知の通りです。

杉戸氏の思い「三川浄化計画」

その杉戸氏が最期まで思いを馳せていたのが、市内を通る堀川・新堀川・中川運河の浄化を目指した「三川浄化計画」です。この三川はいずれも固有水源に乏しく、都市化の進展とともに水質汚濁が深刻になっていました。そこで、河川の清掃、下水道の普及、工場排水の取り締まり強化などの施策とともに、下水処理場の建設のみでは十分ではないという認識の下で清水を送り込む施策を加えることで三川の浄化を目指しました。具体的には、木曾川からの淡水注入により堀川を浄化するとともに、庄内川河口からの海水取り入れにより中川運河および新堀川の浄化を図るという壮大な計画です。三川浄化の実現に向けて、木曾川から堀川に淡水を送る試験通水や、中川運河上流部から堀川に海水を注入する海水還流を行いました。中川運河関係はほぼ完成したものの、戦争の影響もあって計画は途中で断念されてしまいました。

下水道事業における取り組み

私たちは、「水都なごや」の実現を夢見た杉戸氏の思いを継ぎ、高度処理の導入や合流式下水道の改善などに取り組んでいます。こうした中、2004（平成16）年には市民と行政の連携により堀川浄化を目指す「堀川1000人調査隊」が結成されました。隊員は現在では14,000人を超え、市民の堀川浄化に対する強い思いを

感じています。こうした市民活動の強い追い風の下、2007（平成19）年からは、本市上水道の導水管を用いて木曾川の水を堀川に送る「木曾川導水社会実験」を実施しました。そして、導水実験とともに以前から「アメニティ下水道」として取り組んできた下水処理水の利用を発展させる狙いで、2009（平成21）年度より、日本版次世代MBR（膜分離活性汚泥法）技術展開プロジェクト（A-JUMP）による実証実験を守山水処理センターにおいて実施しております。

下水道展のテクニカルツアーでも見学コースに入っておりますので、多くの方に見ていただければと考えております。

さらに、現在改築・更新を進めております露橋水処理センターの高度処理水は放流先である中川運河の水質改善に寄与しますが、一部（日量3万m³）を国際交流の拠点として整備中のささしまライブ24地区に送水し修景用水や地域冷暖房への活用を図り、まちづくりに大きく貢献できるものと考えています。

先達の智恵を未来へ

河川浄化・安心安全にとどまらず、ヒートアイランド対策や生物多様性の保全など、今後のまちづくりにおいて下水道が果たすべき役割は重要であると思います。下水道の各分野における技術開発とその実用化に大いに期待したいと思います。

「下水道展'10 名古屋」において結集された英知が、全国ならびに全世界に発信されることを祈念して、私のメッセージといたします。